10課

9月3日

試練における柔和

安息日午後	8月27日

暗唱聖句

柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。（マタイ5：5、口語訳）

柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。（マタイ5：5、新共同訳）

今週の聖句

エゼキエル24：15～27、出エジプト記32：1～14、マタイ5：43～48、1ペトロ2：18～25、詩編62：2～9（口語訳62：1～8）

今週のテーマ

私たちは柔和という言葉をそれほど耳にしません。おそらく、モーセの生涯について読むか、山上の説教について学ぶときに目にするくらいでしょう。それもうなずけます。柔和は「人に傷つけられても、怒らず辛抱して耐えること」と定義されていますから、あまり耳にしないのも不思議ではありません。現代社会では重んじられにくい特性と言えます。聖書ではこの言葉を「謙遜」と訳すこともありますが、謙遜もやはり多くの現代社会では望ましい性質ではないでしょう。

しかし柔和、すなわち人に傷つけられても、怒らず辛抱して耐えることは、キリストとキリストに従う者たちの最も強い品性の一つです。それだけでなく、柔和の精神は、痛みと苦しみの中にある人々にとって強力な武器となります。事実、試練は柔和を学ぶための絶好の場であり、私たちの柔和と砕かれた経験を通して、神の力強い証人となることができるのです。

今週のポイント

苦しみと柔和の関係はどのようなものでしょうか。私たちの柔和と砕かれた経験によって、私たちはどのように他者に対して証人となれるのでしょうか。クリスチャンにとって柔和は弱さとはならず、どのようにして本当の意味で強さになり得るのでしょうか。

日曜日　8月28日　裂かれたパンと注がれたぶどう酒

問1　オズワルド・チェンバーズは、私たちは他者に対して「裂かれたパンと注がれたぶどう酒」にならなければならないと言いました。彼はこの言葉をどのような意味で言ったのでしょうか。

聖書全体を通して、他者に仕えるために「裂かれた」人々の模範があります。モーセは、約束の地に民を導いたとき、絶えざる悪口と批判に耐えなければなりませんでした。ヨセフは、エジプトで仕える地位に導かれたとき、裏切りと投獄の憂き目に遭わなければなりませんでした。いずれも、神はその民の生きざまが神の恵みと保護を示す劇場となるために、そしてそれが彼らのためだけでなく、他者の幸福のためになるようにその状況をお許しになったのです。神は同じように私たちをお用いになります。そのような状況では怒り、傷つくのは容易です。しかし、昨日学んだように、柔和はそのようなことも「怒らず辛抱して耐える」ために神が与えられる能力なのです。

問2　エゼキエル24：15〜27を読んでください。ここで何が起きましたか。なぜこのような試練がエゼキエルに与えられたのでしょうか。

エゼキエル24：24で神は、「エゼキエルは、お前たちにとってしるしとなる。すべて彼が行ったように、お前たちもするであろう。すべてが実現したとき、お前たちは、わたしが主なる神であることを知るようになる」と言われます。エゼキエルの生きざまを通してイスラエルの民は、神がどのような方であるかについての真実を確信するのでした。彼らはエゼキエルの生涯とその苦しみが象徴していた預言の成就を目の当たりにしたとき、主権者なる主の真実を知るのでした。

遅かれ早かれ私たちは人生において「裂かれる」経験をします。あなたもそのような経験をしたことでしょう。あなたはその経験から何を学びましたか。あなたの砕かれた魂は、他者を助けるために主によってどのように用いられるのでしょうか。

問3　出エジプト記32：1～14を読んでください。ここでモーセはどのような役割を演じていますか。

民が金の雄牛を拝み始めた後、神は、あまりに遠く離れてしまった彼らを滅ぼし、モーセを大いなる民とすることを宣告されます。しかし、モーセは神の申し出を聞き入れず、神に民のために恵みを嘆願し、神は思いとどまられます。

出エジプト記32：1～14は二つの重要な問題を提起しています。第一に、反抗する民を滅ぼし、モーセを祝福するとの神の申し出は、彼に対する試みでした。神は、このどうしようもない不服従の民に対して、彼がどれほどの同情を示すかを試されたのでした。そしてモーセはこの試験に合格しました。イエスのように、彼は罪人のためにあわれみを懇願しました。このことは非常に興味深いことを表しています。神は私たちが反対に遭うことをお許しになります。神が私たちに試練を許されるのは、神、人類、そして地球を見守る宇宙の住人たちが、私たちがかたくなな者たちに対してどれほどの同情心を持つことができるかを示すためなのです。

問4　モーセはどのような理由から主にイスラエルを滅ぼさないよう懇願していますか。

第二に、反対と不服従は恵みを引き出すための呼び水です。恵みは、それを受けるに最もふさわしくない人々が必要とするものですが、最もふさわしくない人々は、私たちにとっても最も恵みを与えたくない人たちであるはずです。しかしモーセの姉のミリアムが彼を非難したとき、彼は彼女の重い皮膚病の癒しを主に嘆願します（民12章）。神がコラと彼に従った者たちに怒りを発して、彼らをみな滅ぼそうとされたとき、モーセは彼らの命を願って顔を伏しました。翌日、イスラエルが、反逆する者たちの死と神が彼らをみな滅ぼすと言われたことに対してモーセに再び不平を言ったとき、モーセは顔を伏してアロンに彼らのために急いで贖罪（しょくざい）を行うように命じました（同16章）。この試練の中で、モーセは柔和と無我をもって、まったく受けるにふさわしくない者たちのために恵みを求めたのでした。

あなたの周囲の最も恵みにふさわしくないと思う人に、あなたはどのように、柔和と無我の謙遜をもって神の恵みを示すことができるでしょうか。

火曜日　8月30日　迫害する者を愛すること

かつてある人が言いました。「敵を愛するということは、真珠が埋めてある泥を愛することではない。そうではなく、泥の中にある真珠を愛することを意味する。……私たちが生まれつき愛すべき存在だから神は愛するのではない。神が私たちを愛するから、私たちは愛すべき存在になるのだ」

問5　あなたが「敵」を見るとき、真珠を見ますか。まわりの泥を見ますか。

問6　マタイ5：43～48を読んでください。イエスは敵を愛し、敵のために祈るように招いておられます。イエスは自然界からこれを理解する助けとなるどのような例を挙げておられますか。この教えのポイントは何でしょうか。

イエスはマタイ5：45で、私たちを迫害する者にどのように接するべきかを示すために天の父の模範を挙げておられます。彼らはおそらく私たちを最悪の試練に突き落とすでしょう。イエスは、天の父は正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださると言われます。もし神が悪人たちにも雨を与えられるとすれば、私たちも彼らにどのように接すべきかがわかります。

イエスは、私たちにつらく当たる人たちに対して、いつでも生ぬるい曖昧な感情を持つようにと言っておられるのではありません。それも可能かもしれませんが、基本的に、敵を愛するとは、彼らに対する感情を意味するのではなく、彼らに対する気遣いと配慮を示す行為を意味します。

イエスはこの教えの結論として、しばしば多くの物議を醸（かも）す次の1節をお語りになります。「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」（マタ5：48）。しかしその意味は文脈から明らかです。神が完全であるように完全でありたいと望む者は、神がその敵に愛を示されるように、自分の敵に愛を示さねばならないというのです。神の目に完全であるということは、敵対する者を愛することです。そしてそのように愛するためには、神のみが与えることのできる心の柔和が必要です。

柔和の定義（「人に傷つけられても、怒らず辛抱して耐えること」）を頭に置いて、「敵」に対して正しい態度で接するために主から柔和をいただくことができるよう、あなたが変えねばならないことを書き出してみましょう。

水曜日　8月31日　封じられた発言

試練における柔和についての最も説得力のある模範はイエスです。イエスが「わたしは柔和で謙遜な者だから……、わたしに学びなさい」（マタ11：29）と言われたとき、主はおそらく私たちが想像もできないことを言われたのです。

問7　1ペトロ2：18～25を読んでください。ペトロは奴隷たちに驚くべき助言を与えています。彼はイエスが受けた不当な扱いとその苦痛を描写し、彼らも主が残された「足跡に続くよう」勧めています（1ペト2：21）。ペトロが示すイエスの模範から、試練の中の柔和と謙遜についてどのような原則を学ぶことができますか。

人がだれかを不当に扱うのを見るのはつらいことです。さらに、そのような扱いをその場で最後まで見届けねばならないとしたら、それは耐えがたい苦痛です。不当な行為が行われるとき、私たちの内にある正義感と義憤は、本能的に「悪を正そう」とします。

しかしこのように生きることは簡単ではありません。重大な真理、すなわち、あらゆる不当な状況も天父の支配の下にあること、そして御心にかなうときに、神は私たちのために行動を起こしてくださることを信じることなしには、それは達成できないでしょう。このことはまた、イエスの場合と同様に、私たちがいつでも不正から救われるわけではないという可能性をも受け入れなければならないことを意味します。しかし、私たちは天父がなお私たちと共におられ、私たちを覚えていてくださることを常に忘れてはなりません。

イエスの生涯を模範としたペトロの助言は驚くべきものです。なぜなら、不当な苦しみに遭って沈黙を守ることは、「不正を正す」ことよりも偉大な神の栄光を現すことになるからです。カイアファとピラトから尋問されたとき、イエスはその状況を正し、ご自身を正当化するために多くを語ることができたはずです。しかし、主はそうされませんでした。主の沈黙はその柔和を証しするものでした。

あなたは不当な扱いをされたとき、どのような対応をしますか。あなたの生活に今日学んだ原則をどのように生かすことができるでしょうか。

木曜日　9月1日　私たちの岩そして隠れ家

誇り高い人々、横柄で押しの強い人々のほとんどが自尊感情の低さに苦しんでいます。柔和や謙遜さとはほど遠い彼らの横柄さと誇りは、おそらく無意識のうちにも内面の足りないものを隠そうとする覆いなのかもしれません。彼らが必要としているのは、私たちがみな必要としているもの、すなわち、安心、認められること、受容なのです。悩み苦しむときには特にそうです。私たちは主を通してのみ、これらのものを見いだすのです。要するに、柔和と謙遜は弱さとは無縁であるどころか、岩なる主の上に堅く立つ、魂の力強さを表すものです。

問8　詩編 62：2～9(口語訳 62：1～8）を読んでください。この詩編の背景となっているものは何でしょうか。ダビデが語る霊的原則から何を学ぶことができますか。さらに、この原則をあなたの生活にどのように生かすことができるでしょうか。

「理由もなく人々は私たちの敵となる。神の民の動機は世からだけでなく、兄弟たちからも誤解される。主の僕たちは困難の中に置かれる。人々は些細なことを大げさに騒ぎ立てることによって、利己的で不正な目的を正当化しようとする。……兄弟たちは虚偽の陳述によって不誠実という黒い衣を着せられる。なぜなら彼らの力の及ばない状況が彼らの働きを混乱させるからである。彼らは信頼できない者たちとして後ろ指を指される。そしてそうするのは教会の信徒なのである。神の僕はキリストの心で武装しなければならない。彼らは侮辱や不当な裁きから逃れられると思ってはならない。彼らは熱狂者や狂信者と呼ばれる。しかし失望してはならない。神の御手が摂理のうちに働き、御名の栄光のために神の働きを導くからである」（エレン・ホワイト『上を見上げて』177ページ、英文）。

あなたは他人の中傷や非難に対してどれほどの免疫がありますか。そんな免疫を持っている人はほとんどいないでしょう。主にすがり、あなたの罪のために死なれたほどにあなたを愛しておられるお方に、あなたの自尊感情という錨(いかり)を降ろしましょう。その錨はあなたを守り、他人の言葉は取るに足らないことであると思えるようになるでしょう。

金曜日　9月2日　さらなる研究

参考資料として、『ミニストリー・オブ・ヒーリング』第38章「真の知識を求めることの重要性」、『各時代の希望』第31章「山上の垂訓」、『伝道』第19章「伝道者とその資格」を読んでください。

「われわれが出会わねばならない困難は、キリストのうちにかくれている柔和によってずっと軽くなる。もしわれわれが、主の謙遜を身につけるなら、われわれは毎日受ける軽蔑や拒絶や迷惑などに超越し、そうしたものが心に暗い影をなげることがなくなる。クリスチャンのうちにある高貴なものについて最高の証拠は自制心である。ののしられたり、ひどい目にあわされたりした時、冷静な、信頼に満ちた精神を持ち続けない者は、神がご自身の完全な品性を彼のうちにあらわされる権利を神から奪うのである。へりくだった心は、キリストに従う者たちに勝利を与える力であり、それは彼らが天の宮とつながっている証拠である」(『希望への光』822ページ、『各時代の希望』中巻6、7ページ)。

話し合いのための質問

❶ **謙遜はどのように軽蔑や迷惑を「超越」させるでしょうか。そのようにさせる謙遜の最も重要な特質は何でしょうか。**

❷ **あなたの国の文化では、柔和や謙遜といった特質はどのように見られていますか。重視されていますか、それとも軽視されていますか。柔和や謙遜を身に着けようとすると、どのような圧力を受けるでしょうか。**

❸ **現代に生きる人物で柔和や謙遜で知られるどのような偉人がいますか。その人物は、その生涯を通してどのようにこれらの特質を表しましたか。その生き方から何を学ぶことができますか。**

❹ **柔和や謙遜はなぜ弱さと同じに見られるのでしょうか。**

❺ **私たちは、ダビデがどのように隠れ家として主を求めたかについて学びました。その結果はどうだったでしょうか。彼はその隠れ家をどのように表現していますか。言い換えるならば、私たちの教会は隠れ家を必要とする人のために、何を提供できるでしょうか。あなたの教会はどのような隠れ家になれるでしょうか。そのためにあなたは何ができるでしょうか。**

エドゥアルドのバプテスマ

オリベイラのバプテスマのあと、ますます激しい霊の戦いに直面するようになったエドゥアルドは、毎日ひざまずいて祈り、神と個人的な時間を持ち、安息日学校聖書研究ガイドを学びながら信仰を育みました。さらに、息子のジュニオールがバプテスマを受けた1年後に自分もバプテスマを受けるため、聖書を学んでその準備を始めました。

エドゥアルドがバプテスマを受ける2週間前の金曜日の夜のことでした。彼が、夜中に突然叫び始めました。「俺はバプテスマを受けない！」ジュニオールが何もできないでいると、誰かが部屋に入って来て言いました。「一緒に祈ってくれないか？」エドゥアルドでした。また、別の声がしました。「何をしてるの？」その声はオリベイラでした。3人は、イエスが悪霊を追い払ってくださるように、一緒に祈りました。

夜が明けた安息日の朝、夜中に悪霊に襲われたエドゥアルドは、ひどく殴られたように体が痛かったので、教会へは行きませんでした。「イエス様、悪霊たちに私の体を乗っ取らせないでください」と祈り、聖書を開くと、「あなたの道を主にまかせよ。信頼せよ」（詩編37：5）とありました。イエスから「大丈夫」と言われた気がしたエドゥアルドは、それ以降、悪霊に取りつかれることはなくなりました。

ついにバプテスマ式の日を迎えました。リカルド牧師は、エドゥアルドを2階席に案内し、一家を初めてアドベンチスト教会に誘ったディルマと息子のクリファーソンを紹介しました。そしてリカルド牧師は、バプテスマガウンを着るために1階へ戻るようエドゥアルドに伝えました。

エドゥアルドが階段を下りると、突然1人の男が飛び出してきて、エドゥアルドに向かって突進してきました。エドゥアルドが振り向きざまにその男を見て目が合った瞬間に、その男は白目をむいて倒れ、もだえ苦しみ始めました。そして、「殺せと命令されてるんだ！」と叫びました。リカルド牧師と他の数人の男性が彼を取り押さえ、奥の部屋に連れて行きました。その男のポケットには、かつてエドゥアルドが寺院で動物を犠牲にするときに使っていたナイフがありました。直前までいろいろありましたが、エドゥアルドはついにバプテスマ槽に足を踏み入れ、バプテスマを受けることができました。（アンドリュー・マクチェスニー）